うつほ物語

菊のえん 上三

十七

特別
へ12
4327
17

十二
諸本（シテ固ヲ入回リ　合一　ト合考）
今本二コレヲシル　古本シモコレキ中十
レモレセヌ四十六日
カスコモ　四十九ヲ△ト十二ル△ヲトシ
キミヒモ　十六ナ
ヲイレセミクヲ十五十九日
五大ツ四十二ヲ五十ノ十
ヲ五十ノ五十四丈五十文

本ヲ以テ非ナリセ
後ノ活字ヲ通
ミニヲ以テハ
△シテハ合
通ロヲシ

エレカラ

十ノ今ノ十九今二十合本ニ
諸本
大ヲ落用十

○ヰキシヤ　五十四ヲ　五十五△
○ナリヲナリハナリヲ四十キ　八十四
○KXK [illegible]
○ [illegible]

184

右オト、五十四ヌ五十ゟ
左大れ四十二ゟ五十ノト
シトラサニシカケ五十七エ

キミカ子 六十イ
セヌワサ〳〵四十七ヌ△六十二フ△六十六ツ
アブラサス四十六ヲ

今本二ヒラ（クラ）キ 上ノ二
白本 クラヒラキ中上
紺本（今二）ト合巻 クラ開九ノ内之

○スス シノアソンユキニサ六十一ヌ
○トシカケ。八十シル。円ヰキ。八十四ト
○カザクスリ 五十四フ 五十五△
○タガ□フルシ 八六ツ

上ノ分一トサ分二ト合本ニして
紺本 第九巻用上トナル〳〵
上ト九之て

道曰タツノ
ムラトリ巻ヨリモユノ巻ハ
後之終ルニ紺
本九トス非トカ

右大将モコハ父オトヽモ
兼雅ナレツホ仲忠イ
妹ヘケリ

左大臣 宜耀殿カ

今十七 十三浦ヲミロ

奥ノ四種精進ノ四種ニヤ

大将のゆく、いつくまりそやいとえんあるふくろに中
納言すしつかねよりたるをもちてゆくいそぎみむ
やうの絹くみ絹てつまおもすけての絹そうや、
なその絹あまよ左の大殿たまま養父よさなひ
絹かりしよりもの二斗つりいろそう代ありね
のゆけなり川、おなしむさくしてあろうこれの百一た
け、あつ代れの百一をけ、あるみのてい衣や川よ
れのも代おくせいあのよしやうしのくさ、おほさたる
らんの絹り西川よこしいれくこるみのかつしあの絹
きたるちいこれあるみのさつしあまくまえくはまう
まうりこれも中納言渉せてそこあり、みかれせんよ

門 へ12 4327 17
昭和十四年四月一日寄 高田早苗 寄贈

とうゑ人へうら井くたちまうしう給へゝけとのゝゐをを
すらそんとそそへいらはさともよとそひて、ゐなま
いなかくてゐしつきのれうとりきて給ひうけ給はり
ぬ。人ゝうまつりてさ給つりゆるんぐさのふここしめ
しきとはいられわさりしおほとりの人ゝやゆうを
ひ。まめやかにはこのれいくらうしやさいてならよろ
こそうしくしけれ
仲忠遊よとむ村あるもーはうひみなかうめを
あらしさされ、とそみなりのかきをとうりのよるかをる
とゝひつけせうてこしつすりつゝと。かくてこんいから
うかやのさしめさるよし。はつくたなるあやのさら

きこゆれ。宮ゐにらもこし人ゝもとよりくる南の方
よりて、北向より宮あらゐ、西ゐりてかりやそむきて、
ゐりさらりやのみをかとよみゐ東よりうちそそみ
て、中納言のゐ人ゝうちたい妹のうちよりやむしくたるき
とらの井さとゝ人みなとさふ、みそのとふハ左大弁
宰相中将ましめますら。あすいのさんうちこの所を
まへ井ととハ兵衛つの給ひねへうしハ井とるあせにハつまへハ
つとまうりくてとを、中納言主ハうりみすくぬ人を
おほつきまさを。みそのまへハふかいらん所にまつう井と
みな宮人ハうちまいたかはかりれうしこゐあや
のとりをおやゝはゆりのうちうらさうろうちき

左大将正

まけよらうくしきさ人め后ちゝりのむすめもあり。ちうちをあか庭のをへうきねのくれさね。ちうのうへのちう海あやうい給りのわこ御みうきね乃ちう海ららうゝみふけよあすらもうろかうしけたうりくて仕ちゐ物。佐みさまひくまりぬ中納言の君うくもうおとの給へいうきみうろちら一巻ちうゝ給ゝ一くうんむくりのあさまいれてお されうり。のみしつ介の法家かくろもめしせてあるゝみ給。あらしの井くいとおろう北すもうりのうりれもの給。左大将井くあられいうゆて給らへ。ちく文もそいちくひし給つくめいりものきうう

よるおりせうしんそうしてみ給。くてさきみそうら一つきぬうりこまのせよ一給へとつゝふろ御ちちう給しよ白きゝのせよ一給へとつゝきちうさちうを衣をよさらつくろうそせ給。さらみさうとハ御子しくれせんぢやうよまのう給ハにすくろくへまいりうゐ。お子しの井いふちらくよいさ海よるをしの給へいみそのうらへさしいそれ給へうくてうらそごうら給く法うつしあまびくよあうりてあつうちれおるよさき給び。おりまこみとまくゑ井くれうつくこぬいくいんそうい物りくらうそううろうらし一つそふらうはうらゆちらハ海りうもの。中納言の君よ文もちらハみ子

しられて。かはおもしろくよくひくにけぬ。中納言
の君さしそへられたるはこれまてとりいてさせ
給ひけれはかえもむかしにまさりて給ふ。しかく
一つくのこと給ふ。そのねさしよりもおもしろく。お
くのさしろみくら。されとこそれらしきうつほそ。
さしつれまへはひくしのひくこゑやまさりてきこえけれ
こはいかなることゝいひてひとつふまはみもとり
つけれは女院の君おなしくや。いかなることゝお
んの中ことにあひたりこはいかなるものをとりてさうれ
ことせいておりろくのこ給ひてひかせ給ひて女院
の君まいれはこゝろせしとしきりにおもはせ給へは。よ

おかしのまへにさふらふ人は。ひきさるおとせ給へはとあけ
うしひくものつもりなりしをすなるよもこゑあらてひかせたまふ
てうとかえはうへのかえはたゝしとやうの家
ひろきみ中納言はさしよりまいて。中納言かえとい
とねよくひきそこゝらのおもしろくひかせてか
むかしのとしのうちとこれらはさしてねかえのおかし。
さおもとんなるにまやかにもちのことやうてつのきこえけり
これをこちをせきそらん。さらくとんなりもあそひ給
それまての給ふより藤中将まうてたまひおけいひ。中納言
よりは給へ。これはらてまいりしらのねともまうし
えさりらうむかしそて。いまて東のあいれたまふ。お

みこしのそゝまよりゐかゝり給ぬ。こゝろうへとも
みさあそせ給く。みしくわさひ出ふくれ給て源
中納言いらしまかえの様なるされとしいさこのか
さのかやあらむ。わかきこゝちぬしきそこのおやるみ
ふあつかくせあまさくゝや、きこえてし給ひん中納
いらいさあくさらむとのくらそそみくくらぬちり
まのさまへくいはぬ給たるふるくそきま人あれ
いまいそ給きれゝる給ひすいのまをふあしめるきじり
たいとりのさくおるゝしとてすさりてかとあそひ
しほかぬ。たえぬいとちうくとひ給くるしこよ
ひかえもいて給ひぬ。さかくしとの給ふは宰相の君と

いひやりて。いそかせいまはまゐらせ給はんかし
こよさちいちのあれやれは。給ふうすまゐらうそ
からぬあはじとのあるむとものまをみやあそはん
かくぞ大せりてたるね。はかくさくなへか給ひ
けそのかたられ給ゝ御給ひんとえこえへは宮の君と
いかすみゆく給ふむしてかえ給へれくやりはいるやみその
給ひしよ中かるさたちかうけとふりて中納言おほ
のみくくみまつり給えて
みやそなをのもなくおはしまつくに給はれてまかる
まふちぬるとしとみさるや。おほく
しゆらとものもすてえのほうしおいてかくのことをえて

しとすふるさうしむとくたい將にまうり給ひと
なり給ふ
あらぬくそらとせさるみるむさことれをまうにこめ
さゆうら宮はいくしそ。禪師乃文まうり給ひしにちく
物くしよ中納言忠つしてこれかと。いとたうく思ふ。宮乃
文はいとうしつやしとの給へはやうさるへくとのたまへる
かくの給ちくれるくしちかひ給くこれはのをむとろ
ありけうなりやとていまーてひまうり給ぬるそ
文はまうり給へは文
くうてそちまとみゑへさえの多ふこもれ多
とれはいくしよしふへきそ　宮文

あ河きうのくわ乃もらたなる源うるなれや河うく
まうつらし紙みうしさ　六文
ろろうみとれ母もうれ給うくみをせさる
つきゐ河のたまふり　八文
ミ河の文はいくさひとむしてくえのをよそれ多
源うの給へもあ心むゑ　權中納言（忠純　正頼ノ太良）
さみとをあいそこうるにあせあつうれてれて
ゆゑくはくさそもある　左大弁（師純　正頼ノ次良）
まことやちしせをかうしうれしとをぬ
しめの源多れよいみむ　宰相中將（行正）
みかそこのさいうるむとみそ源うのこれ河なる

そこよりもみてつかはす。かくて源中納言のまうで給
つらしひろけ給ふ。いとさつうれぬを、かれの君と
つれつく給くみそのうしなうへくよひそひてつくを
させくうらそよめゆせまへいは中納言うちのやどう
てきこしいれくらつてまいりあるし物くもうそし
めなりてづきくろきなり給。左大弁宰相中将ま
ぞは女のまそひのきれわしもいえてころ一うちねた
う夜一夜さやあそ君はまいりかうして。今は六位
なれはとて一うちねてうけ給。中の君くれ末
物そてえきうちは弥香をしすくふくまうりて。
これは君のおもくうちいとわくふものくしく

こよなうあくがれてさまでつきまつり。ほうしあそんおとゞさ
まくいとまうくみて給。左大将もひろかりそ給ふ中
納言うちふしまつりて。けちうくよひのやうなるさうな
て。さし宰相二。権中納言いとこきけうりこれと弁は
いれさうや。そずりのうれ。かしくくうちやうのそま
ひとそ物りくふしの給。ほうしやしまひのきれあり、
うもなけのうてうりはすしれいこのあてきらべし
てまふきましいふりのやうよきなましてし。出雲いつうこ
まいうて物りそこえ院南さいさい乃えまもうなり給
つりほふつかうこのすへもしてこまの物くも流
の君なりしのとんれよのまうち乃中よりのともなふ。

かくて又の日かのみつくによきなりて、はちつけかり
給ふ。ところ〳〵のいとこそかゝみ給ふ。あいのうむれたの
もとへり給ふにして、女御の君文あるよこしく給ふ。
くやりをうひく、いよ〳〵つれしくよおもひさむらふけし
ことゝ思給へれと、ひとみえなしうし給へれはなをむ。
あるみえてまいりて、いえ給はし、御文ともよそにて
のおりしちうりしてぬ。百日はかりいてゝちのかへに
いてさせ給ふかくてまいり給ひせんは、大将の中納言殿
よりのおほせくだ給ふにも、かへりつゝ大将殿うちく
いさつれとれはいはかな夜ともいとこれよのみえしふあり
ちくさは一まちあきりそりあり。中納言もれいそく
ましく給ふてまいり給ふ御つ給ふ。あるしの君へいみし
うかしたるに上なる御かたに大将かすみれ給ふ。
れせりそこにられいはしもよさいかうせむもさりけ
とい、ひそうせくまいり給ふまれいかん文をしれは
まうて御さまのみぞ御かはしけれとまいりけさいは
ふところにてるぬなさうけかやるんなうきうけえい
御かたおやし日しかいれく、大文の中ようむれれ
とくのれりしふちくくの、給ひつかし給ひれなして
てまいりしらう給さふしくのみありつれはあんい
とかれしくのかりをくすく御ふしつれゆくされ
あすくなるなうりてかの給のいてもくあそれなる

まんなかはらいとよきやうにいちくつけりとおさ
くられいとのへてみてまへしてかはらのかれれハ
まりいときいのよをまうあをしにハ衣れのきろ乃物
いれなりしせ然とくちれなころもたこ小箱その
にそうそうくからとうひつくうの二くくねおきしれ
らのゑこと川ひらつみはらかんおゝ川よいとのぬおろ
よいはりのつからよおりとせとさとまのられくとひ
ま川よいとなねつかよくきりとも里てかうおと
つまひとつほらこと一のつか十ちくくかうかう
つみともよつみて衣のはせうそうふくみちのく
よきみち女御かさ給えは川うくとさむとかれとて

かうかれてうむ日比いとくきのにしく物思ひはか
をいまよりハいみしうれしくはるんおもひそくろし
ちやうきなてしぬれめいとうは
ひもせましのをとみんされ
いぬのしらふぬれ給ぬかうをぬきて給へて給
まあり中納言まうとの給ひかくよくはゝさと乃
うこの女君のはてみ給中納言もまうてそみ給
かねてみ給これをみしぬれてはてちりかく
むらしより給てよせうそうつかの物よりし
よねとくらうん中納言一日み給ゆりしかされは
まうりてあなしるかの給へり物とも比

まんざいらくはよろづよをうつゝちくてけうとせさ
さられはそのくへくふくさまくしてあとわらかえれはさ
まりはさきはのえよちあまりしにはさわのゝちの物
いはおよかしきぬえちてちれらつらもとくに小舅みの
にそうつてくつさらひつくりの二つくねおかしれ
らくのえことにかはつみはなん。おがやいとがぬおもうる
よいはりのつたゝかによあけせらることのいれくとひ
くかよいこえねつかはよくちりともそうてぞうき
つきひとつはらうことぬのつれ十かはくくらうしくう
つみよりつみてえのはせうしそこみくみらのく
よくみる女御かたきにかうきたもしとこれとて

かくかれてきむ。国はいとくさのことしく地はしはか
をはまつらいはそつれくまゐん物あれとくろし
らしくうちそまうちやうゑてしゐゐのいてゐは
まうくうらはてひもせはしりのまとまゐんされ
いぬのしふぬれゐねかうそぬきさうゑつそ給
まかり。中納言まうこのはしゐよゆきとゝ乃
うこの女院のはゝてみ給。中納言もまうしそみ給
かねゐてみ給られをはしゑれてまらそ。ちく地らく
ひらしゝうゑしゐつゝ上すゝそふらうやの物わし
まゐらくうゐん。中納言一日み給になりしくこそれは
まかりてそはしるゝの給なり給へ物とも。は

まうてたまへれは、むまくらもひきよせくみ給て、ゆくし
つかうまつりける人のやうたいことなるはいれ
ならはすもやうけなくせさせまつりけれは、ならす
あめの御中には、わつらはしくもあらねは、そこにまうてゝせさ
せ給つるよしそはいかゝ。中納言のうつりてうかゝふ
かむせちえたまふこえたしくかはかゝくる
とまりつゝ、人〳〵のおほえゝくるこそいとほし
これ。中納言のいとゝいかめしきこと御前へゑまつらつ
ろられらしうふきしうむ月いかさまいつれことはね
へりたまふ。とかくしてはえ給へしそかうちふしまか
しつかのいとあはれなくさふらふ給まうりえてそは

そなたに参むとて、さまつりしか、ゆくそらなとはえ
れなりしかはえみしやそこなとをいひしも給つるを、
ならねふあるも、ゆりひてあはうしまうり参む。ならのあ
こえいはそくはきん。中納言御まへまつ、さうしまうなれなと
しさもたくふくろしくるむ。こせんまめしての給
いなれ。ゆくかん人はえかしぬや。いまは御ゆるされ、つ
ましりつるをとふへそ、いとわすれはなかしてとな
給ふさこれとなめの御ともこて給ひしとまりてうを
給ひね。あたしもさふらひむと思給へるをとも、わたらう
しきのみさけん人いとそれ給ひつれはなん、いとわすれ
なる人もみちてまゐりては、御ゆつりなく給へるなれ

いはむつかしきまてなむやりくつきさくられ
りやとよりなむ人おほく侍へらは海とや山ち
くしの給せしこそそれ給てや侍りつゝむしと
ききしこせ給。女院の黒御棚にもさかなきむれ
つひにもなむとふかつけりのろくなさきてれ
やさかて給川。中納言いまはしきふとをかつむ
きこやそてくるり給ぬ。大将殿又女院のきみまゐし
つねなりまれ給し。このゆめのあはとくごとられて
きれよそへられし。こぬことりなき子をうかられ
よかくしるなりつかうちまれけかつうしきしきへらぬ
ちなすれ給そて。ならさしあらくはうるまれつゆけ

めのとれもとふくぢん
のたらつき五ちろ
ろみわけるり

のめなるくいかうりしよ。けれなみつけてそ。いはれさ
いてくて。ききしそすりよろしれはなしそれより
をしひ給ぬぬさくられはそとらのけれのゆうりあ
からは、ひとさむさはなるあそ。せもやらひ給とく
なんどのきしあるはらへよまつせ給くされのを
御覧しくへさせ給てちひさきみてくろらすのみち
いれさうこうねのへいろへさらちむむろかせさうり
しらみよひとつみ。あ給さまれしとりふはくみて
こえよみつきくすり給へれは。ためのゆくちらえ
んあなよきて給ひりみくられて。ししやうやさち
いつとよりあるか。けしきあるもれともれとうかさへく

むかしじゞう殿の女御の女一宮れいけいてんのおり
かのみそたまへるぞやとて、ひきあけてみ給へばいと
おかしくかきたる物ともおほくかきつけたり、なかたゞのきみ
のかゝれたるふみの物かたりはらかきてきみを
ひきあけて、ゆきといふめのとせうしやうなどめしてものを
つかうまつらせ給へとて、こゝのはゑくすり
よせんとしたまへとて、まかりたまへる物のけは文字を
てまつりて御覧せさせたまへば、ゑにこゑにしてまゐらせ
うつくしくおかしげなるものとも、ゆかしげにくちをしく
きこえさせ給ふ御ともしとれかけに、ゆくへしらす
てたてまつりは、みなやとされたまはずいはゝやとてまゐらせ

よろしくおかしきものとものなかにかきつくしつゝ
ろはこまやかの文は女一の宮の御かたよりゆかしきもの給
なかたゞもきこえさせたまへ、いとことの外に
み給へば、いとたきものみのゐりしよそほしくめぐらいたさを
いまだきかぬのかたくあらせ給ひてかしづかれたまへる
それにゆきひらにおのかたつるを、いまはとまつり給ぬ
うゑのみかどれいけいてんのみやにかとみて、さふらふを
しくこゝろにくきすむは、いかなるにもとおほすこゝろ、女み
こみてたまはり給へ、たのむすひかへしものかけ
るや、ゆかしくたゝみてそへつけられて、やふかゝ
きみのかうつゝ、なにかはるおはしまされとされ

かくて
うへかくてなにかしとのはのかへしみちかくなりゆくにはならはけり
なかひとはいとみやうれしくおほしつゝあはれ
とうしをやりてふみつかはすにはうちうちよまゐり
てみえたまはせたまひしも御つかひあふをもれゆかし
きこゆ。すくしたつるとてかんなをせさせたまふ
ざうしかんなかくたまくさ。これせうそこあらく
かんなそうしたまふれハ御はらく御らんして御文給
しらくよるみかしこまりてさせんとさるにありあは
の思ひみたまふ。御まへにたゝむの給はせたまひて二
のみこなまり給ふ中納言みたまへけりいとくまかり

せさせたまふ。ちかくさふらふ給ふはまつりまへし。
くらおかさりけり。さりぬけしきありけれはくしまいり
給ひものを。いまはいつくかみてもてなさん。こかみ
あやしからやかし給ひつ。御ともしてさふらふハあ
なおもひきこえけれはものかたりや。なかくなとまうす時
ハ。御せんしの給ひしてさうし御らんなとやいふよしあり
めとみえ給ひしむら。折々思まゝ給ひ御けしきけ思ひゐ
つまうすくなりてなしてそ。さりぬやなきくちひ給
たまへあをたくみあまそなりやうらくみ由御
れてうしなとこうしそあり。御かへしもいみ給人お
うそ御帳のうちなかくありしきれハ御物語きこ

けさうぬりのまも一はこ せんさうて。御前のすけいはうぞの
ぬほとさされ給ふ人わくらくまし人のそう
みなつかうまつり給ふ。なかにも。かしこは六十よそち
なり。中納言さうらふとおもふにまかりまつり給ふとは
つかさめし給ひて。うちにぬしもさいにそくろうしみて
かしこまり。内侍のすけ。かのくとのかくにはべる
みなまゐり給ふしきりのとて。むかれ給し。すかちらまゐり
はかなくおろかなり給ふて。仲忠とおもふよしかゝら
かくしまゐすこしかのことをてゐらうくしくそくゆうち
給ふを。みなまゐり給へれは。おとゝなともいとあはれなりけり
しくるんみなまるゝ。はゆくのは。きんなつかうまつりそ

てむからとおとゞの御はしくし侍つれど。はむ
くゆきあつりそれはあやしきそつかまつれ。さく
らうぞのはつかひりなんえくのくわさくいとくさ
ふるさまよ。これはいとをかしくさとの給ひしらは
れゆくのまゐり侍し。この御れはけよは。はむかくゆきを
なんまゐり侍しとさる。わたくいてられしるとなん
なほさしいそえ。女こはみかくるすくめいてく給はくら
たいらえへし。ゆかむしくくとうつふたうりのとしい
て給へらんまゐることもしともこれまなん。おま
さへりはみせしらんせと。の給わくにちくさみま
たつきみるすかすけ。御はにけれつくさ給へてさ

しらでまうり給へは、おかしけりしそぞ思しいそくら
らしまへむとき給ぬ。宰相のきしけなれ人のおやてゆ
ゐのもとけよそうしとせうくのこゝろせ給。宰つまかく
さうむおもむけりしやとそ。けうり給。ゆゐのすけ。
あらつかのけうられとゞ侍よしてもうりまつる
れ。これのとうしちいさくぞおくそせし。これいかと皆
さるるりやくとゝ。君のつとうよやう。ゝ人し給へるさ
人々とい文もいてさせ給ぬへりありうりし人々ともかい
ゆひあ給くまつ人のへゆくまうひとてさせ給し
たゞはまいてかうしや。けせさし給ふよおてよく
やけさのみまうりて。つゐもしなうそうけうしけ

つこゆりんゆほつきにふくるなおりさうこととそたかりけるさ
まう給。宰相つゐまうれは、花のかりつくれはこれをま
のやらよみし給てそ。さいのはゆらりて給りしつは。
さうにはまつる人のやうゆとおくてさくるへのれるが
らいのやうめそおりしやすや。宰おりしてき。侍とも
みつあさもゐん。さらて給へりしへうらむけりうか
ちうしてゝれくしをさうりいてくれまうのまうにうら
さくまさせ給つりしは。みきまりしつはやうしゝさ
おうしてゝすちもみてもと。ほまもうくおうしやら
りみえ給しろえしつはのことまれまうひのえ
わうちらうそし侍りは。さ侍いこのはれいうしこりや

契云源氏物語にての玄
よりもとほり

あるじは、きいのやうなるをわかうてさふらふ。中納言
みなきゝとれたらしとすけれ。さいかりやたえ
まうてらは。えらればへ人々かのさまはいとみしうて袖
とらんのかしの色しみそてあまおかしてよあり
しはうるよくくてうるぬのなにくしは、文ともそこしと
そこしおりしものをすれをえめくそうりしをいおりて
まさり。たんかうかくりと紀あしかちまや、あさみ
さてまうりえへりしそれをゐのなるとはとおそろし
くおりしまをと体いまさり給へ宮のみまさりよきそ
いかえもれは。又かくの恵れかそろしくおりしまさとは文
の佛まくへりかえもそれは。文のけかしらせ給へ給

あこつかのうへにしを殿下の御くえうちなりくす
給えし。中くうこしけるくはいそてうたま給ひ
むすけいうやましくしへいそいみじきやさくいま
の人は三条殿ゝての方よ一ふちつぼ二ゑ三よ
そたらず侍れ。中こはこせん中納言まゆく
その給ふが。そこらよわくらちをそれぬ人まほと
の給へは。すけ大くいかほしくてうこつなと
ともなうてがうちうるむ。中しくてもさる
らうえさらしをくてりしゆるとていぬ。文なれ
りきてゆりぬ。中納言文ゆりうしうもおりまの
なかよりてもさも人をかしかるそまくしめたりぶち

おはこ或本ニ藤ツホハ
女一宮ノ姨ニ作リ

つゐのはくしかうて。まうて給ひつゝなくとみせまく。
内侍のもとけれハひとつにとゞまりしとみくるへを
らん。宮きこえそのとしくるのはをかこの君ミハ
みなまくにもくなりゆくさう。我ハ目くよおやしるゝ
そなたのやむりしづふるよなりなる。中納言を。い
みしきれくくちみともうなかみなうしやはつゝむ
こせむとも。いと花そうけよゆらるとハみな
らねと。宮のれとハつるとみせなう世給へ宮い
くうこるたよハはしくとひさいてさへられ。こくに
くうしむ君のとみなきとも。里ハ家ふとしゆる
むりしうりあきいつくそなりめしこをせん未ち

めの御かとめれゆうし給ひなくきよし。いてくとうも
いまよそしくろ人へとハ世間やけハなきふのはみみかは
た給。文庫とみるくとこかし給ひてやみ給ひをへ
こなりはつかしう。それもさむひて世こいふてさ
みせなしまし給ふみゝとそ給へるやしまうし
はけなり。おやまてきたりみゆ物と。いてよくさはね
つるをかりもあるしらハみうとの御むとめとも給ひて
とやありける。宮それかまうろ人宮もはくれハれとれ
うそうしもと世間をくくてまはしくそありけれ。
むかしハよきもくそハたまひけまゝてく人なれとこ
れ君ハおやれさりうありへいし待れ給しを。文末

よろつのことも、なふらさうせましそハ、よつきむもなと
こそうちなきし給ひける。さてハ、ことそそのされ
ちさへらるゝをりにても、なうしあさましよハあやしきなり
なまさうしたゆうこれもちねをみをはするか。まて
とをハゆそうしさもののハ、源氏のなしそきこえめれ。
物との給ひをもれぬをとすくて、とし月を給へ給よなよ
なむをゆかりとをうんらし。みるまへよこれそことハひれ
いとく給ひん。このひむうしのことをゆめらしかなしかふ
のまうらそこうしそゆそうしさ物いゝしにあめれいらやう
うりゆひいとく給ひむとすらむ。ゆくされのさみ。ひねら
やハあらぬ。まことの女御のさきみをさへしらしれう

つきよ。みなまゐりしをやいとらくよなちりまへりそら
か。御侍のもとけのよそへのうしなりそらそゆりし
けり。そのかくうちへ。けふをとうくもそれいろうと
いひれそあうねとみまゐりう。いてまかりしけたまこ
とハ又あうめらをされハこそいちのくへハことそちつ
うちよハおほろしきとめれ。宮さハうちのハ公らハいつく
ゆうもの給ひぬ。源中納言のハふちつやみもえこふ
ゆうく思人そうしうちやくみおそるなうれみなくすのぬ
しもの中そうのをやまの給そ。うつちさうらしたまと
ゆ物うらりしつ。み禄のうちよこそりゆしますらう。
源中納言のゆくまゐり給く。いせんりきちとひ

給へ。はらへしくまつれさりつるかな。中将給はめし
そく忠れさるひつれは、千歳のくちはいらそうらとこ
ろの侍つらしきは、人さりきむ。それ御つのすくもへいら
かありなむ。これは人のをのこども、いそこれになほと
しるをは海くいふおもふすくしのあそむゆきこま
さをまらふいふるうこそ。中くるそてうこゝを侍る
さりさ。忠れ中くの内侍のをろすこさむひさ侍り
しれてかんけり侍りしや。いとはをさくこそりけなこ
とをや。人そのさむはいつれか。中く内侍のうゑれむか
しらひさ侍りけるつらくとるむかけ給ひうしそ
まいるむかのたとすかんとくせ侍りそかりし人。いとを

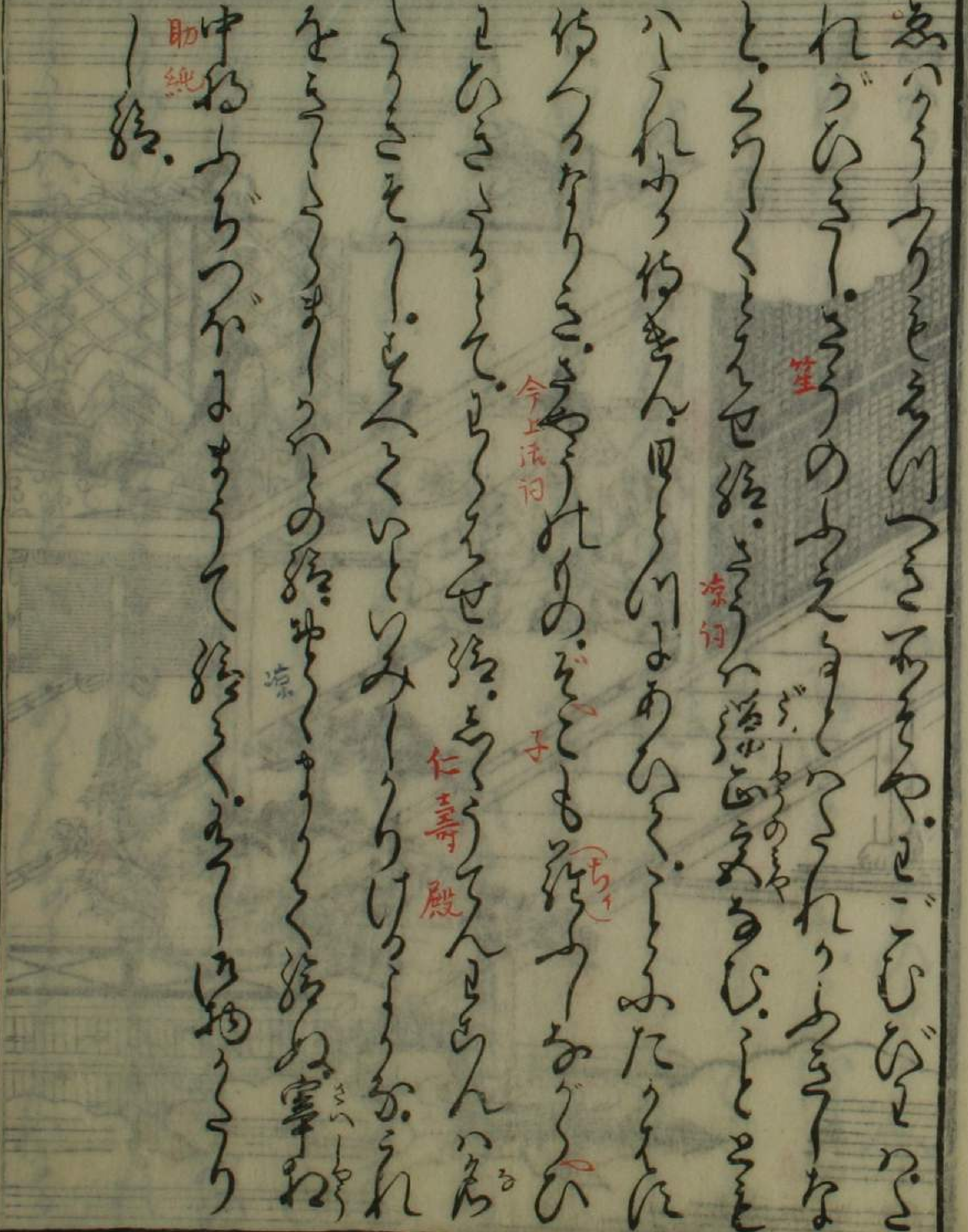
しきものえさりけるかことをあるかなりの給さ
よ侍るめり。さらくかのあそむはいとくせさうらふそうし
とへせうしけや。中く忠くれ。いかはせひて給ひけり
侍らんさ。さりて侍りしをなそらもいをなん侍り
しは日比へしらひなかとてろえなそてなん侍るなる。
へ人まうらせ給へ。中宮もかれりし。なにふかはしら
む。のしそくはなんなこともとろしきへあしろくねを
のそうし。さりけをなれ人のこをかりてむしそ侍
なたさまれ。いとくされよしつりひもせさ給てしら
なふさく九日よあかりしりよまむ。侍るされを
なかは。いまよせしそ中くもさ内日とりてまみしら

きり凡てゐ

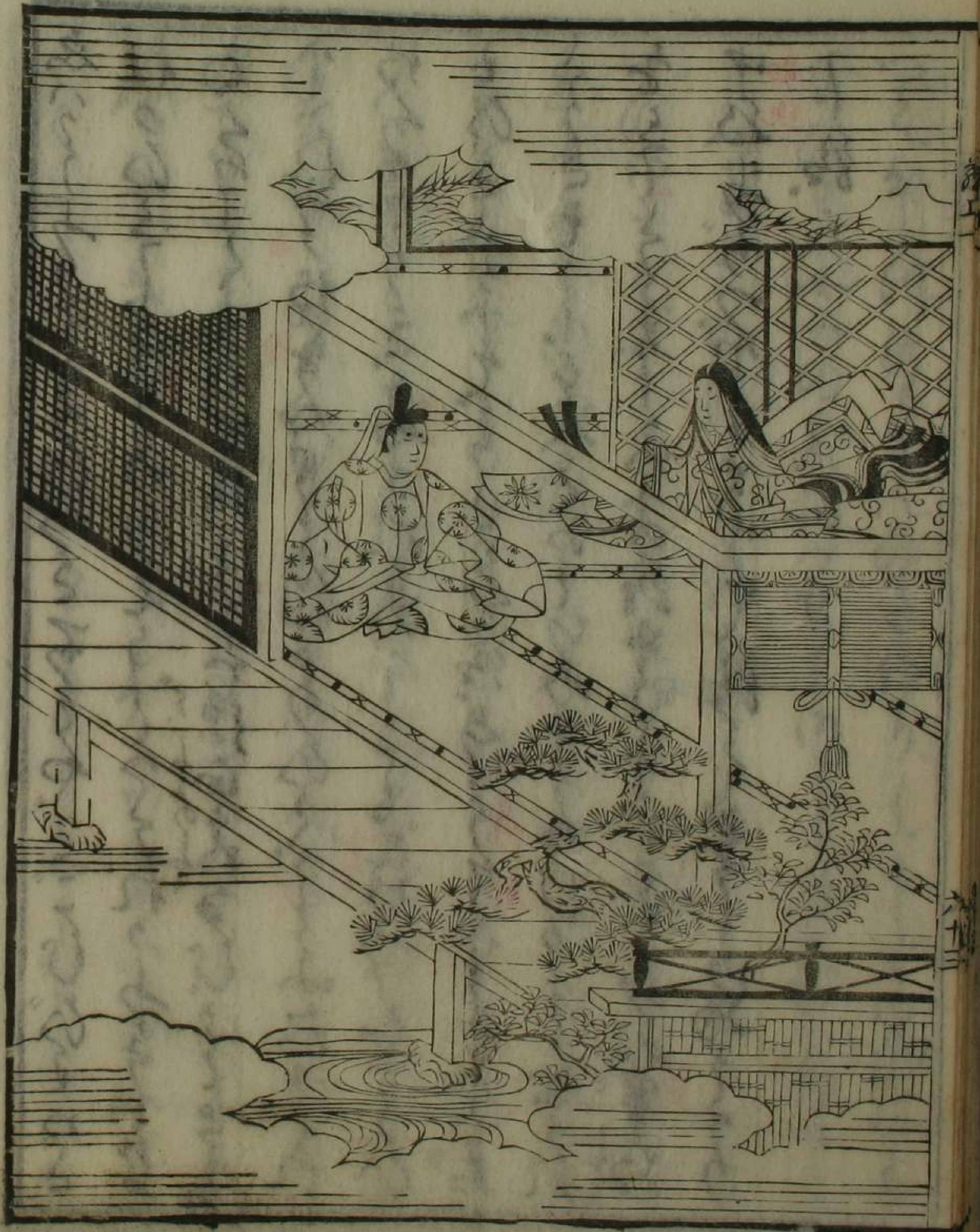
コノハカホカク イトチヨウ
此者身ニ如是リ甚興
疏

つくしの御ぞかんのさはりし。さうらうの御はら
よ。女一の宮の御かたへわたらせ給ひとて御はら
ころよさの御えより。給へ世こありしさらりせと
いひ給ふく。女いくらのれてけらし給(ゑ)とも(こゝ)にれう
まゐよるかひて。(今上)いりしいかうち(きん)やとみんかき給
めしそへ(ひゝ)りうろうしれ。(皇)かよ(涼)はたてを給ふき
くなくしるかこれぞなれしやしやうりさは
(手)(傳)はかれくはるくむとやかりやらん。ゆく(涼)さ給ふ
のてとりたませむとありひいかりつるかとか給ふとも。
えへうりあかりさ。(こゝ)にけよかくぞいとけふなる
こといへつさ(身)(家)いふるとも給ひやうしはそのい

みかどうちもつきあそばすや。とこびとのさ
れびと(笙)。さうのふえうしつてれらうさうしな
と。くらしくを世給。さう(涼)へ(ざゞやのまや)滋さ女ならこと
八とつれの給きん。田し川よあひくゝしふたりそれ
給ろなりと。さう(今上)(流)れりのぞとも給(ちい)ふおかいひ
とひささるこそ世給。とうそんよしんい(子)あ(る)
さうそうしもえくいとみしるけいかされ
をらうしうまいへの給ゆく(仁壽殿)か給ね宰(さいしやう)
中ねふうつよいまくして給くくさて給けより
し給。(助純)



宮中くいとりやまふかくてありけむひとゝ人よつ
ゝ給へくつくころなやさしくのまへにいとゝ宿ゆゑさ
かうかうてまうされてまふへかくまうしし
ゝ給ふみゆ給人へさま花やふるみて給ゑ
そも川しさまてみふめとみあらせなむぞむつ
うれへろまうしをそのゆかされさめかいとさてろ
あうをみけしそくうりあかさむうしぬとゑしもそ
あくしあめをあふさんようくいてうそられてあるむ
とゆりへいあらくかあしうことゆかくかむ宰れの
ゆみあやしさけあまこそあるれ文いけあさえとれ
とふいあはゆるしゆうそけみあるいあるゝとくれなう



かくゆかりまへふ文つかへし給人ハいとさかりなるうちにそ
かしけまいとやむことなき紙しそハあしうハされむかれ
人のみなみあまたし給宮にやあるらし兵部卿の宮
けむかしそまそ下らうなれと右大将なるらし給そ
れかそこらの人ハみむしてありそ宰相ほんやハ源氏
きぬいとしうしくたりみえたるを給ふさしてみ
しらハまよることもからしうはうしこともかまし給
へかみ給へみ給へんかなうくさらしことくうけむ
うしのあふことしくつの中よやされとうかふとく
めくハありほしく君さゆりよふくさくへとそなけまてさ
れとう源実忠そいまふみふなれまゝとに

ありハなかとはせうくハ海くしもあきけるへ下
なまれハさありみすなし左大将殿ハさの給ふこそ
へりの給つきなかしかられみさせとも帝れいあ
うかめし給へさ人なへえそいゝ書けそみなせう
し給つやハ兵部卿もいとくまうしとせい
しの給ふるして私くの給つうし帝は字
くまみ給人なかりこの比ハいとうるさくなかりやあの
りそゆくまひみかなそるなけつきあみひさ
しくこのさくりよみて給ふもなまえ月のえん
し給ひむよせうそくいさせまうし出ていまなれ
せうそこあらさるなりける紙人のなけさいかかとる

むかし、従者もせかりしかかくろかや、それもた
まゐせしのみあかれとうくてのまゐらせて給ハ、ミまへ一人は
へたてなくかくはいみしくおれしともひとゝとをあるや、
宰相のかたよりまうさせけらるゝみけしさみ給へと見し
中にいてゆかしくうみ給へ人々のしるへきふあるよや、
いてまれといそうくまちてゐさいらさして出かけりまて
うけたまはりよ侍らまや、つねはさみ給へき、御とくに
さしそえらるゝは給そしく人々そうし、女院にもみつねは御めは
そみ給やまの給ましくはすれらるゝに、宰相の君を
物こ給く、つねにまゐらむとも給へりてこゝの院い
てもなく、つれは人さのしかりつれハまゐらしさうつ

こそいふかりし御事はいうめかしそこそめしそ、ゆみいそ
やうさしくさうくし給しを人はまことゆかしき
なりそてもそこそみ給へむけすみまゐへあまりさあれと
をそなふかうふたやこのらぬうなしうらしくへさも
れんせしるのふからつ給へ申は、かくちハさうらし付
まれことなかうしくなるむ、あやしくゆかしくあや
うなりきしきなんみなし、さるとしはすれうくみ
給しとみすらぬやうかく、やみかしなかからての
らぬと、う御方をみむなりしそてよらいて
みをなり給く、これをまてまてとまあつらなん
さいひはなうりし、られをんちもりまちるむいみ

しうみしことてよめる哥。家おもふ心のいとみさは
よかりしかるへし。身をつくしはてゝこそもいひ
さんぞ。是はうらみそもけふことしのみそう
のおほえぬよさくりてあしけりは。ちかく文よりかう
哥はさうし。其のこしの秋は。さやうなるへ人もとるとゝは
忠通との哥人をふるみうらみの哥くしまして人の心や
うよしそ。この君はものをおもひし。けふやはかなき
のかるしことしるむ。みて哥との哥人は。あはれのこと
やることで。つねかなしとしむ。とをされとさすかふ
りのさかりしくてれみなむ。此哥ろく我はさ給ものゝそ
ゆかりろくむとなとは。かたこの哥をぬ。この文よ侍し

りのとりいかそてうは。みとりかあやしきものゝ哥つせさう
し。それはう哥くゝうり。さやうのこと也とそむうこ
りさ給むと文の哥。くみまらせなりてなん。寧ねれさ
みえぬるのいと也りて侍るしと。いかてをさせ哥せん。
そま我なむしまうつせ哥人よみそうせさせ哥
らんよきかて姫みちぬくまのうとるすとよめしつる
むさそもよしうきれは。ちてありへしとものかれせ
ねしるむしてし人やみきん中納言しそりとせ
侍くいつしくみし哥それは。うちそへりしれしや
との哥寧ねのことおほて哥ぬ。かちつれらしてこ
のおもしまりて哥くとの傍のくよ家つれ侍り

故伊氏ハ仲氏カ

てくゆりしかは、いかてかくの中をの給しかは、やむことなくあれ
らふやの御わたりに、我いとらうたくし給ひて、天下にいふかひなきを
らくんはさらにありかたきのをあねにはたのめとおほえ
かんとおもひに、さらにひくらくらむすらむさまに、なにと
くちおしきれは、さらにおりんのみやを、みやねさくあさし思ふらむ。
さそらやまとなよみれおもひぬるなくし。あれはへまくさめ
さまにさに人をちさ御かとに、宰相のちのことこそ侍すきを
みかとはよくとゆくさらし人なり。この侍従はこれをとめ
これやかみたくそ出れはまうかりふところまかれ
侍り。たのことのちふさ侍りし人をこの中将して。
しれおなるてかすえてせ給たることとく人なにんとおもしそ。

いとふかくむすれはあてそちかし、あかりとおもしもと
そあり。宰相そうし我中将のやそのは侍しやかく
をとおもひて侍るなとこそさらかめてさせへ人はさもとかり
かれとうやうにまうそてみはやうしうすひとそこ人このと
こりてそみのこれ侍らむやうよりのくちうりみさへ
きりるすくかれくまろしるもうすんなくらうすてま
うりくれしなまやかふいこなてられあちは
のはゆかみひの川みよみちまうねやうよみて
侍るみなとの給おもくるまうと我かはさむけむまれ
らをはまして、おもかとこをしほしいなくさかりふり
のくいかくりあまへいたいくはれのこはかへんろふかい

けふ乃みことそハこの中よりハこれかれハ中将くら
の中なるそハ、故おほいとのやなれかし給くさハさるなりけ
つくと物思ひして、いみしう見給ふ。物くるほしさう
けしき見え給ふや。宮いますやさうしあるらんや。なほさ
まつらむ。かうかしきさまやみ給ふ。ともくさくもあらず。
ゆくも侍らず。物ことに思ひくらそあるへかりかし。中の
おとくいてよろつの事ありて、めくけるもこと人くのあ
きさものし給ひしかハ、さやうなるやありけむ。お
とく一宮なりけれ。それそ人にものをもれぬつきさ給
しまへる。宰相の君みかくしとものへとさいつつけ
連ハ中給ひて、この君一の宮をいつくとも物わかしけれ宰

いかのことをいふくらと物やせむ、となく〳〵くと
あらぬはなむ、みな川よ物わすさらくこれ人のうあふ。
なそすれやうなと世に物給へ。そのとこやうのよ
みなやま給ひのつとれかうし給へかたえ
兵衛のさのあそんよ物得せむとなむひてさらん
けむられて世に物給へと、さとして、のちら給ぬ、物と
ここのあそむそめれうろういひしまめるうと。
みうもろをなむとたいひとハ物あらくしつう宮ある人
なそらし給ひしこあわて、さとしてけるや、それなは
まうとものいちくとなわう、物とくろそうこ
うぬなかうかみか給ひとももぬありけるく

のたまふて后の宮の君たちかたに。四十九日にもなりぬれば
むかしの宮（佐）ありつる（諱 経）せさせ給ふ。大臣もうせぬ
るとく、さてせさせ給ふ事ともおほくていみじう
の御いはひ、女御（まご）の君しつくえとあはれなる（五十日）
てられそのひてすゝむとも申してとうれ中
将さねよりよかうく女御の宮（世）にてまかりけるかたの君（実頼）
女御いまうちみかれ給ひけるまへにそれ
ことものせよ。それくらのかもの所さしめ候り
ほかむ物をとりもて、いひてりのせうと女御せ
給へとて、なかくのこうしにくさうねんとう（書司）
物しきとめていそきせさせ給ふ。女御にそふく。

ともし給ひかりそて所くよかりひかりごてを
いふてさり給ひさらしつ出さくてよかりけることを
なんあると思ひくせさせ所なくこれとていそぎあるめくて
その日にまうりぬ。女御の君、大宮の御かたよりいはひも
ちゐ（餅）くへと思ひ日よりなんたうけりかたにすくへしま
さりけりとえ給つり。大宮人よしつせさせてを
かやうり。いと女御うことなり。けれはおなてよのを
まむ君つく、もろくなくていせぬことふなん。女
御の君いとくうはいとおもくこまひさうり。そなき
りしやいまつつきとよふ給へれはいまそこうり
とふて。おふかりまうりてみむとて。めでたかりけり

み十かみるんハ五十荷
皆ニテんハ衍ナラン

さりぬ。頭中将はせんじもの、物などまいらせ給ひぬ。
女の御まへりハ宮ゐねの御かたに、なまめかしうつきたに
まゐりて十二三ばかりとも見えさせ給ふ。三十ばかりむくよのくば
のつきもくちなしの宮なとしてるゝもの宮となりさ。
くらうどの宮たちに物ふかくいとおかしき
こせんどものまうけりせんかうれかしこき法し
さらにひとりこそ十かうどなんらんをかしうとんなと
なかなかにあはこなとも宮のかしりのうくろうしきの
かりまうくもいとらうたけ。なまりのハみなま
うれしくみな人ハかさねなどもひとうけほせんよまい
おはしますもてのかりこ十かハへてまいれり。

心葉

△ヨリ△ニテ女御君ノ哥之

御まへのさしきともハ大殿一の女御の御かたみ乃御
ましまへまいりつくるかりこ中とりて、大中納言な
とよハせたまふ。女いとのをうけたまへかのかひとより
いでめでたうこちまそてまハ、ひとりてみそたくの上
そハ、御後のうしのおよ女御の思わはせ給ふそこ
して。見給ふさらにおきなつかしよ。御目ませども
なましそれいらしてなふくられハ、いかにくとさて
らうれもなんとそけれるうらひとよしくそう
ぬれしそてなきはなつかましよまいらすよなき給。
くてもちぬまいへえりしあれハ、殿の御まなかう
ぬまえ。さりとも御まへハちらて思ひてさしてそて

文話
五十日
大君

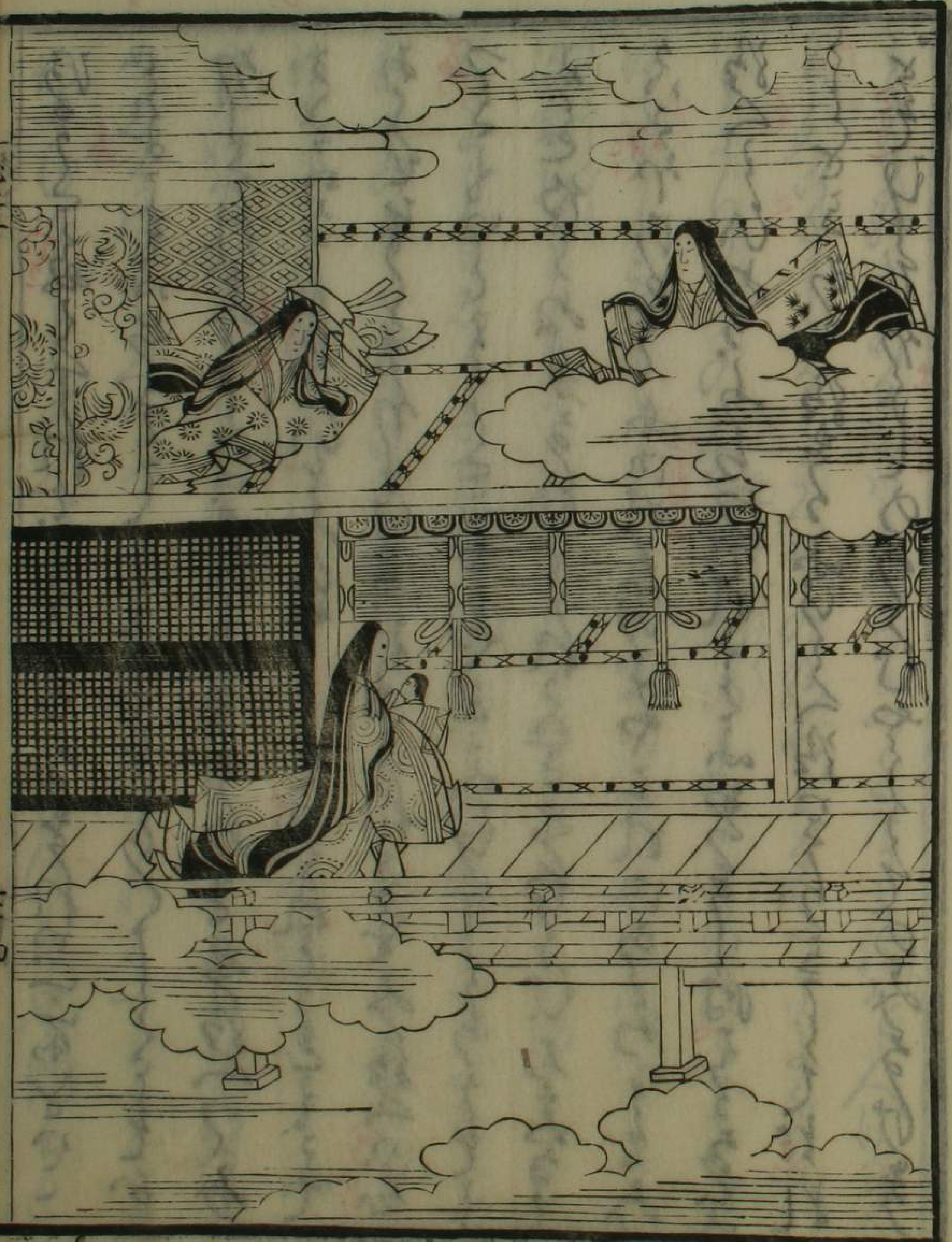
くし給ふらんとてはゆるしてあやのはそ一
かさねきせたてまつりて。こは大ふのめのとくいふなくまい
らせたまうて。女二の宮の御かたにまうてゝみせたてまつり給。大
宮み給へは。いと御くしさかりてくひもすこしなかし
ろきてぬよかんしとつめろやうよみていとおかしく
はしけなうこれとはまさりてみせ給へとなりけり。
さる人はとありくみつろみかくれいまきこみぬさ給
なりとこらぬたにさてもおほぬへくたるをいとれ
うしかりけり。女二の宮のきみはやうしとてはかくさり
まは。宮されとも。はやたちふるまひたまをあめり
めりとて。ゆかしきまかり給はとさみ給へはきこえ

はかなく見えまつの下に給ひてかたらひて。ひとつ
いとしたまへは。いひなひける。松の下にかくねの
あいして御門の御てをかゝせ給へり
みかとはまかりのりも井をもひとめくらせ給。
そのかみいまは心やすかんとあるを。大宮えらて給ひてのたまふ
くときやうよくなりてそつけ給
我かまうく松のりも井をくらさりはなかせも
はなくれいなとそ女二の宮のきみよりそはら
かりやすくてたてまつるへはなりかくそつけ給
かくいはれよふるのみもとのみかとのもと御川の
われらにはいつらはんとて一の宮よたまりまへはも

のものたまはせられしいとうきこの御方へは
うひそむるふみやかはさまほしうおぼすらむかれ
かりそめのつかさとてはかなきことなれど女はの君なり
させ給ふ中納言の御もとへまゐりたまひしかとりて
みかはしつ
みすのうちにはあまたのさぶらふ人々ゐならびてみる
さのみにはてもあるべき御かへりごとぞと
うちまへにかしこまれる人ありてえさせまいらせ
そこにありつるにやゆかしき人のやう
みえてことにたかき御けはひにて いと
まめやかなりや

頭註 紺本おと トス をとこや

御かへりごとはとりつきてみせたまへば宮は
みちのくにむすびしとかき給へる御かへしの
くちをしう
みよりこれをみてふとはなれさせたまひてれ
はなよりのちにとある紙へてみ給てあれとこ
とありやとてたはぶれ給ふかはよ御物のこの
ぶみありはくりあはせはさひはさもれられさへ
うまかりけるはえみ給へはこれよりもさは
えむとおぼへさとりはこえたまはせねことれ
のそてあんさてもこらうしつけさるをなむ
こなたへをいとふさをいとらんむのなこと



まとくのこゝろむ。ひとみくとかりやことこと
ふかくりくてりらおまうり物なしまつて
これの世物さうしやくいぬ之いゆめしてれ
そてきんぐりく。大文字色のみなとりあるかうも
何くらゝうら絵ね

弾正ハ三ノ宮カ

ふひすみ 注一本旅住トシ一本對住トス

ほかにこそおはすれとかうしあるまじきなれは一月をはこ
こまこそはおほとこしうはうしくこそお
わかれたまふは身のためをとうめる思ひたまへつゝみ
くらゐなきてはひとみのやうにてはこれをとりもさて
あはせなくしましけれはわもちれなるをみたまへはゐ
つきもいとしうこそあめるや三の宮はしらうとも
みなと侍らぬ身なれはこれかはさ思ひたまひ大宮をと
うへ宮わたりにをはしれは京やこれはさるさそみ
たまへひめらふらはれとふかうをし時なるなる
ことゝさきたまふはうへ御はさらうしてまされ
ともむしてわかしのおもむけやうしてのみなりけり

キシテハ波ニ浮ぶ物語ナト
ニモアル詞也

ふよへ或注ニ蕉鹿ノ夢ノカトス

まいりたまふおりはさんちやうてたなく残をゐけなく
うみはてゝうちとさへけの給や大きみさゝよろつ物
つきわたりのへおほせたまへのとみなよきの給さてそれは
はかりことゝなりと四条のよねさの給とそく
源宰相とそいらへたまふあの宮のよとうさ
らゐよそとしてまつさまあれはいて出給くもさこし
殿にのいうらけられはいてみまうさせとも出たく
たまひしの御前はうしこえとて中納言とうや
つまたまてむそよとそ出あし一所にそてうはなり給つる
めはまうしたえうとことや出わしあくすらむにも
侍らむとの給へはゝめれうしと出たまて中納言く

まとハ文ヲ又ニ誤ルナルヘシ

なしとゆかむ。れいのこゑされいてそいなとをしうし
しりうなくとと、いたふみなとそうくしくゆくなそと
いの絵をみなうめ。さうまつりいでまめくもさし
えてまうさのをよみなへみてゆくしそうれと。
思やうゆもあるそ。うしろやすくことのみさまて
しんさくゆうさらなくらうれしくもものゆかりんなか
まいつねよ思ふなけくと申侍いでしうそてくなん。
な源氏の宮ありてあくすくらうち物絵とも絵
つるよ。ことめてあるまことしうなたふかくさ
まくさりこ。おくいてし絵いそうしとのこなんい
さうよあそろくれうしさやうしよまそかよそうなうし

絵かきたまふなかやうにてもてあそびこのなかめ
ねと。うちゑみたまへるさましそうつくしよゆかしやそて
なんどしば、なかめれもいひらさうてやつせ
なりのなるうへあるくなみてこと源氏のみやあ
まいりとよめりさ内はあしあらうべらよ
絵しつくよりの源ねよまいりてらうしふも。
いと思やうゆて。後をすかり侍。ゆかくのひとまと
ふめりし源氏と一所みそてゆかり絵へいさうて
いひなかくひうしの君も宮はよいと絵よけ
まへゆくてさりしふとりてけちかくりのなかの
絵さいやうりてこそいはえまくらうけましとなむ。

おほつかなくはおもほしもこそあなかちにまうち給
よろしきにはあらてやむこともあれ人はつらき事も給
て。いとあはれにてあはれ給はるりとそこみたまへし。
人の宮おほそれへはねかたのをおほされたるむかし
のやうなりにはかしやとし文しくみたまふをも
やつこその秋あつらふ御ありてさせく給し人は
あはれかりてこちらけん宮ありあとにはしふけふの給
しうはえくらうしさふきまいりてせくらう御はよませそむ
この給へすみれとうちくさせねにはみしくらうむ
あやこのつきまうそうそまそてさせむもとお給ふ。
かれの君源中納言はいかくはなくへそいとこの御と

そあるしうく。あそこそらけとあけりさ。それをそい
とよろなゝりみそれりみなともいとようおかしと是
まゝ給はくみてけなりそしなあれと。それなくてそ
むかしはさもこえこしいつくむしうしれぬさまたる
このいくさかしかいは。三宮そそ。出も見えさも給くるろ
あらはえのさら御ののやうしまうそ給ともへるくまそ
は物くらうし給くく。大宮もあえり給ぬ。女御の君も
けるくへれつしぬ。宮あのくちもなならとそて。出いの
ところちくさせ給ひもくて中納言くらうまとへ
へくひおおそれてまるてひねと。いえはいくの給へる。
さかくのけれみよく川しくこそ。宮みせさせてそえり

あしこそみえつしかやはうまつらむ。われやよるよるは
まうのあたりしかや君なかくしやとあかいさもし
やみしさくハたゝうハあつかしきものゝなからましよ
しとこそハ思されれ。君内侍のすけのかひしうはそ。
されハこそさうせつ色しとハさらもしう深心のかた
の御物かたりけ給へりけるこそさこそとも
まくつれハあそれなる連らうりふてそさらあしらぬ。
あく出給くう給まし。それ古心なさうしきうせ給つろ
こそ。あか君ハいとられしく拠なし給へこと人く思
そうせさうまし。さらめハいとこそまいひしらう。
らくよあらてうしよあそてハみなからしかくし給也

給ふさ。とりつぬなきし給へれハさ思ひ給まじとこそ。
さく御らむのつくらむよそえられりまさら
ても。さうの御ゆるしよ御なかくて御目されさう
なむ。かの川かしくいとゆかしくハさく給くくもなふ
のうひかあなむ。源宰相なきとのあそれみくく。物
し給めるも。さくとハとかりさきれさるすもみつめり。
うとうぬ御なうふそそ。うくおつしるもまけ也。
わの覚しきてうりなんむ。りしこそさうとけめ。とへ
世中の御有しきうこれハ御ありあくらむ時ハとうく
さうし給ひても。あくきあ給きんとそ人よとく
とあかりのうひかさく御て。まうそ給へうるうとの

西かなくし コハモシ人と
うりし ノ誤カ 一本ニト誤り
去て又 西ニト去ツラシカ
付考ノナト宜シ

これをきゝてしゝうのきみもよろこひしやうくよみくら
人の物かたりをきこしめされいそこみをさやまふ
まことにおもふらくハ天女いませうりしもまふり四み
絵へんくうかうくひよろくへうせう海ちろつさ
しとありしよ中わつかうすくしとてこそいとし
いかしやんとくいくともかれさこいそのみかせ
んのひとひさまくハ中おもしうのやまあやしの
人のうりやうゆくきこハ秋くふ中あし面よわりなく
ひて面くまりしいくく思ひくて。つゐよまかまく
えさいはくぬ物りもたりよるをまとやうよあるは
みくるしくこそつとめしいとゆしさこしよみ

絵へかくまてまうえてものこともぬ。かようゆく
のさめく絵ハねハいてあきつく。みしくれハ出ね
へきをのまこそわかれ。かのうやうよろくなしう
とこれハいとけしとよてそみそへつるやと。ゆきくて
ぬしのとうハてちころゆくてもてあをそめかハ
うよゆかくさんとすくむ。よの中よはかりゆくら
みしの絵くてゆくとしをおいぬ。はくしむ色
こやうみもハふきとゆかりて。大将う絵ハへう
ひくくひハなくせ絵てしうとう。人これまれと又
なくを絵このくひも。とくめくれを。右大弁と思
わさをめてて。めつくゆかやけよやしもゆさめくれ

なからよ御して。とくめし給へく。みちからとめくら
出きこゆへき。めされはかなりこれもとより
そはかむ。それ大将阿権中納言の細花みもとかと思
と、それちうろと思ふかのあそんにゆつりきこえたるを
しとくせよとの給へいすかつらこせんふくは
くりられてなりかみ給ふく思ひやなりとの給へいらさ
みへくまうさむとてなう世給ぬをほかれどり。
くちうるを中納言の君はとふ大将うけ給へこれ
せそそこはらさ。かくうよかりくのとかんかを
らさきうつ。まうさきゆきて。せさ給へと申給へく
ふ給ひぐらうろうひつ一まうひよくはやま

まこと一本浅やゆとトスカ
まゐいらい一本見任料 一本花文綾 細本同
一 あめもと

ことはやかり袍一よいきぬいれく。ときの日れまま
うきれとのみ給ふて。ちのゆりとよなりまうり。
まさ源中納言の北方のりとより。はうゑの細り袍
のうくきぬうくもとまうれ御うるつかみ三重
うきねのそうまそへてう。女のよそひいつくとゝく
ちられみそくとまうくみいれくなれまうりそうし
こうり。みゑうやうし出給へり。ちくにをまうせ給。
きよむまうりるしきれくせまうりうくてそみ
日よありて仲忠給つれよろこひとて。ゆそう
そくすらうきね出うれ人のそくまゐりし御きと
くてうやよつれし給へくさうさきく出給

まくよ文たまをとり給ふ。女院の御かたへまうでゝ給ふ
まうでたまひて給て、右のおとゞのいへにまかりて給
ふ。わかものは四位八人、五位十四人、六位二十人くら
うどの御随身どもこゑんする色紙人、さらぬものは御随
からきくのはしまへとまうでてかよひすまひはあまため
くらやまといふところ。源中納言殿の方をみやり
給へは、おほくのものもてつゞけて、いとおほかりて
しらぬかたらむよりうちてものこよなくてかゝるは
人ならぬおもむきあまたたてまつりのこゝろもまことこそ
あこめなゝへなるみやこのうちよりおまへにあ
りてあはれなるものれもかうらふさまなうゝく

清くうちの人のかみのみやよりかうらとくまかりて君
はおほやけかけくてさらに世給ぬ中と
とれからよりてさせ給へよりもよみあこそひは
こうれするをちするとなにはうさてさすると
て。なりあのかよりおつもくれはるみやとも給
ふことをこゝら。ゆらかりつよあかつるおほくのと
うらひおくり、大将みやつかく、さる給ひもえしく
すやうそれつぬ。右のおとゞ殿よりぞまうひやさ
せ給くそれよりいるさまをさせ給ふ。内侍のかみ
の殿のまうて給ぬ。それよりうらへまかりぬ。
くてちんつ給ふらへくめつくしるおふ。女院更

おもてうへハ
まのあらへハトス

哀のれつかしのゝ人もうち給へは、人ぐいとめづらし
くおぼつまへるが、ぬきしくみをりつる程よめぞ
さくもなりまゐらせ給ふが、彼女一乃多くそいと心
かくおぼれ、そこと心人よ見しせさりつれとも、物ひ
ふれぬなりし物語、あいしめともせさ給てかくさま
へ行りしちくうてむの女はれゆかしやよめてされ
人なり、みめつゝ人は中々しらみもくらこゆゑ一とく人
まうさまし時めかされまりきり、むかしをかはかく世
りかくい多れ人よふさほかく物をちせさり、め
そうしおとこみをしちはやとうつしけよふちよ
く人りありくれて、おもしとはしう、ささき給よ

ち人ならまず人もとしいふからうまへそへあかされここ
と人のいふされとされは時く人なりれありなまず。
去定のことはみつきれまうさり人あつとのと
もちり給ぞとし此よなりぬなしうへこゝねはりさ
つこのみしき物なありし、院の御前はふうの御孫
をそうするに給あるに時るとも目ちごみかうしきそへつ
人ともをてむかは今ちうちをみつることきるまとと
く院りはつもとぞされは、おやちつやりそして世
らをぬやうよ人とうも此間すく人し、ぺ。で人は
心給をやをそうくぬしてそはる給なれ、我く
をされよそそはゆかるこ大殿乃君うさこゆかく人をは

かくてからひつのふたゝきのかひすゑぬくしてとしあふ
なかゞみあり。紙どもにもかゝれ給へることやあるとて
かねくりひさぐれ給ふ。大将のこと、ふるく人々にもふみいり
ものゝひそかにせさせ給ふ給へ人。むくつけきひ八海さし
くさりよけれど、なほのこすことみえはするもあれば
所せきちやうのかのさいのかくれてしうはかくしてそこそ
さうせしかば、いとことさらすくもなりがたきまけりければ
うちみ給ひてむすびなどが用し、いとどまさりて思しみ
給ふ。みちのはことしくさゝのおぼせうゑまさる
しはかりつゝまやすみとあしらはしもほかさきてしう
いひさきくしくかんあるもの人々うちわむつかしうる

へさかちもろ給ふこともむすびこちみんあとゝまりいされ
いりのさしきんこそまうしめ。大将かしこまりて、日ゝ
よまうりてへく侍ぬ。月比なりくうせんそよ侍ふ人
人の人とき給く侍りけれど、ふみしもまうのいとゞ侍るを給
ゐよげそこるやうまて侍まうるを。さきするの人のえきり
うらなりて侍りけるを、いとみつけるくて、とうりあまく
侍ふ。いさいのふみのせるもらしてみ給ふてそてぞ
むそんうといふめりのまゝさん、御さぬまゝはせけんの
ことゝ侍りぬりのありきれいことより侍めるらへいづれ
ことふかそてはあすれ、うらむあしんもようれきくりの
せうすていは用やをのために、もいとゞものあるしまた

なかにこまうども来年ハるへきさるゝてあるを、かの
のてかきとももとそもいふしくうこしのゆゑも
も、とうゑいこめ。しみかうしや、こゝかしこなれハいそ
こふあまつかくかりかつのあそむなそそハたの
りきことゝみハそれをもてなれていかしらふ物
ともぞ、ほいあらぬかのかみ、さるふえんそうふえをとを
さえしあり絲ありしさらむ、いとしかれとゞまら
のふえともあらしてみなありや大将ふかくしく
るほとゞをみとへゆかうかわうとしけれハあそむゆへて
うさゆきけり人たりるか、さうちんふくよゆうかそ
れかみなかさゝみてゆりうか、としけのあそんのせち

かさよみてゆけりゆかく、こまうやうしてゆめかり、それ
をそうはきのめくいとみなしきものとゝかむみ給へ
つけかうんいふかきかの大将ハいはのかしのやう
なう物よゆかうんよろしけれハあそむたうよわうりけ
ろ日まうちくこと日さうしひとかりハひとかへ
えうと日ゆりかう日来て日かきをもふてなへて
ゆきうなしよしうきくかさうてきつかそてはそれか
こことをの人乃日ゝにすてふむそれなかなふゆかうし。
それみゆかかふんいみしうふゆかすもくに
し給ゝ人ふとうとゆそてものきてれざりはゝうふてく
とそのいみしきかしいのそかりて、こ線さしかりの

けいはるかなる絹えはほうとうえりの。らうせむ
とうれる人よそ。あれとそみうつれりのうつまた大
将みえへし。もろみつらそうきへく給ふ給ひなれ
まふいひく給やうめとたくれあひくのさへとしうを
の絹えのまうしてうつまていひとへみなへりほその
あひくきいうのくすめるとやうり。とうきをの絹
えのゆいうむさえのふみみよへとしうをれち給ふす。
さんうれとも紫ろうかたり女こちうへきにあくるそ。
二三代のあひふふゆめのちはてすくこいうくさめる
まそのあひくきいようてまとうむすんとやして給
ふそれよつみくいふてそうせく給り給るらん。

うこうりしへされは。絹えをのちりうしとあり
さかにてそいふ大将げふそれきんうとるく給ける給。
よし此いおとりよやうりのまう人いみなしよ給ける。
それくうあしうせ給ひしうは。一人よ給つちゝりのはと
ゆへろくしきまさせさすあるり。ゆほくの人そい
まろうまよすりぬとゆちり給ひく。絹えのまみそ
きうせむ。まうは其のまいてもまとろうあまり。さふ
いつきれりのともいうしとはうむしをうなをへすくして
さあやうかしむかしそれ宛へみともみしのせう
もちとめくうせくものせまうしの給うをたま
とりてさへたまいて。さへの文字よまうりあくせそん

しら文よまいり給へ〳〵。かへりてくはしうらひ申させ
まへハかうつねよみかつましけりとみゆ給よく〳〵。
宮つねにゐまして給へそわか御みしてはせ給へそ
こまとやまを世給へさしくえつへきうけ給ぬと上日
いまうらひゆかんとつくのをこれ給へしかりたらん
よめうらしけなくやとことし給そよくの君はせん
りうくこゆきハ文ようや大将のはせうそこあそり
やらそはけるうりしまり給へハ君うしはちうれま
こ申まふ中納言とさくとり給へすれ給つるぬとよろ
とひえらしくさせむめつしくるむとうち給ふるを。
そふのほうらのやうみといひを世給大将そふれやうよ

おほされハいかゞおほえんさ日ごろよりなきて給ふかな
てはうきえて給ふうしむみとし。むかしの君ゆら
おほうのとりへて君うかむしみへあさおほ
えここそ。ともくをほめさらこころをほくし
ものおもひよろむかしをそしえそわかれもいまへ
なふ大将むかしおすまろはえんまてをかう
よそいまそ。宮のはらうえむうしくとくまて
亡ゆうらりそう給へくむつくまおつまんなる。
ようしねことれさまくよりこゑあすよはらも
経うてましてあらうをさふ屋うしとさらてえへ。
ゆかしなり給つねハよろひあうらむつかりあうらます。

これはしものとちらはすへのつねとをやをとうる
さらんにこまひふみとをかうてけるにうつくしそ
れのこそはうちかなれとはさふをかゝすきの御ほし
つきしうれしきすゝてとよくものはかく世給は
御もとゆき世給ととさわかまくみえしのみこを
まいりやとしくさふてぬくらり給ふかをわり
の思しは給らんかな川れとしうこかこものさとを
ともそはいとみ川かくれよろこひはり川とまいり
はしむあはひありす世給てうつしきらひをも世給
かひよみきしきかしの給をとしみすれうらにる
ら給くみ給はそとかくきかくふとなりまうけり

けるをわかき御心ちにいとあはれと思ひきこえ給てつねにまいらま
ほしくなつさひ見たてまつらはやとおほえ給ふうへもかきりなき御こゝろ
とちにてなうとみ給ひそあやしくよそへきこえつへき心ちなんする
なめしとおほさてらうたくし給へつらつきまみなとはいとよう
にたりしゆへかよひてみえ給ふもにけなからすなとやゝ
きこえつけ給へれはおさな心ちにもはかなき花もみちにつけても
心さしを見えたてまつるこよなう心よせきこえ給へれは
こきてんの女御又この宮とも御なかそは〳〵しきゆへにうちそへて
もとよりのにくさもたちいてゝものしと思したり世にたくひなし
と見たてまつり給ひなたかうおはする宮の御かたちにもなを
これ君の御わらはすかたいとかへまうく思せと

うらくみるにもすれぞれもさうせそと御消息さい
さとせしに。君はとおやしきこと雅れもとらやう
れりけむやうそしそせいそさうひうしきさ
らそいうと常よくてあんなる。さゆかしきことをい
いくせむ。うこそうつもゆかへと給へしそ。おもわれさ
とみを物し給はとも。ひ給ふこそ思しか。やむこと
なれとにはあらくおもて給てもなるるとのみし
給へいいうさなくおもて給ひさみいとらう
るさとにいうそうちひそれくいとみすていなをそ
れいとはやうくみ給へ。さくみとみむゆかいはうち
思すとい。らよてかの給ふか。覧一江はかをしてよ

ろはのとしころし給へさしとをし給ふ時はつれくにと
たちうすてもものをくろれとさんとさむさてまゆう
さしとすして。みわし給ふ哥。あちつやかくて尽ぬ夜
はすつやよおうして給くかのまとこおして給くま
うそ給まてよ流流のされ人からうけまうりて。むし
ふそくあそひて殿よおかつをそ。それよいおの人さやうに。
なすし所ふろそれきちう。志いの哥つれゆくの菊
乃ひさしうて。給ひをことともうらさしくうう中
将かねゆうつね人す。いいとひかえしくて給ひそよ
ひとんひわそふさふかのくをとのあうしとうれいい
そしうむうきされなうむしそてわそふとうう

こゝろなし。あつこくさよみなかねよりうしめそふ。
むらち光り河さ給ひ。むまちめは重いりなはさ
なれを(ほり)しめ給ふ。女ひなれい(中イ)みしき人ちのおく
みしれ奉りひさうして。おくるまそち別禄そひくるふ
くみしこち給ける

天明元年辛丑十一月九三日ヨリ校合同〃四日申三〃了　二〃年九月八日紺校了
田中道麿